

## Ⅱ. 解説

### 1. 国宝（美術工芸品）の指定

#### <彫刻の部>

（重要文化財に有形文化財を追加して国宝に 1 件）

もくぞうろくかんのん ほ さつぞう 木造六観音菩薩像	6 軀
もくぞう じじゅう ほ さつりゅうぞう 木造地蔵菩薩立像	1 軀
ろくかんのんぞうないのうにゆうきょう 附 六観音像内納入経	一括

【所有者】宗教法人大報恩寺（京都府京都市上京区五辻通六軒町西入溝前町 1034）

【法量】像高 六観音 95.5～181.8 cm、地蔵菩薩 162.7 cm

准胝観音像の銘文に名が記される肥後定慶を統率者として六人の仏師により造られたとみられる六観音像で、像内銘や納入品から貞応3年（1224）に制作されたことが判明する。克明な写実を踏まえて情感に富んだ菩薩像の様式を創り出し、鎌倉時代彫刻の一つの到達を示した仏師として、運慶次世代の中で最も注目されている定慶の代表作であり、当代の檀像彫刻の代表的遺品である。平安～鎌倉時代に信仰の盛んだった六観音像の彫像の唯一の完存例であり、光背・台座にいたるまで当初のものを残す保存状態の良好さも極めて貴重である。地蔵菩薩像は六観音像とともに伝来し、髪際で測る像高がほぼ同じで作風と台座形式が共通することから一具として造られたとみられる。

（鎌倉時代・1224年）



（左から）地蔵菩薩像、六観音像のうち十一面観音、准胝観音、聖観音

## <書跡・典籍の部>

(有形文化財を重要文化財に指定し、これを国宝に 1 件)

わ かんろうえいしゅう くもがみ  
和漢朗詠集 (雲紙)

2 卷

【所有者】国 (文化庁保管、皇居三の丸尚蔵館収蔵)

【法 量】 縦 27.6 cm 全長 1468.9 cm

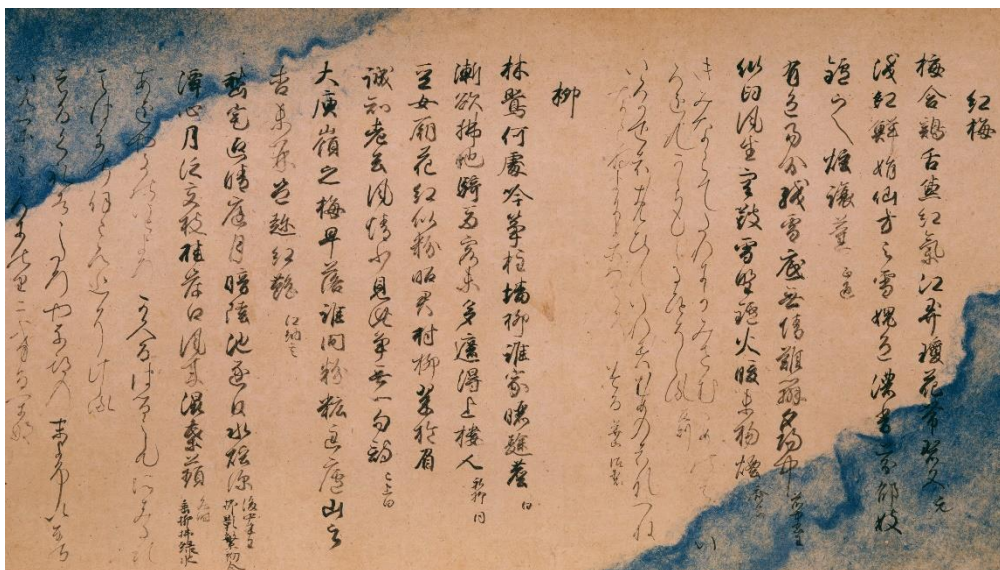
和漢朗詠集は、撰者とされる藤原公任<sup>ふじわらのきんとう</sup> (966~1041) が漢詩の秀句と和歌をまとめた詩歌集である。

本巻は、上下2巻からなる完本であり、「粘葉本和漢朗詠集」<sup>でっしょうぼん わ かんろうえいしゅう</sup> (皇居三の丸尚蔵館収蔵) とともに和漢朗詠集の最古の遺例として知られている。

本巻の各料紙は、右下と左上の対角の位置に藍の雲形を漉きかけた雲紙を用いている。雲紙の完品の遺品としては現存最古であり、雲紙を対角に配した例は他に知られていない。

本文の漢字・仮名は複数の書体を用いて変化をつけながら書写されている。筆者に比定される源兼行<sup>みなもとのかねゆき</sup> (生没年不詳) は、平等院鳳凰堂扉の色紙形を揮毫するなど、11世紀中頃を代表する能書<sup>のうしよ</sup>である。

以上のように、本巻は我が国の国文学史、書道史上、極めて貴重なものである。(平安時代・11世紀)



和漢朗詠集 卷上

画像提供：皇居三の丸尚蔵館

(考古資料の部の重要文化財を分割し、書跡・典籍の部に移管し、有形文化財を追加入して国宝に 1 件)

きんぶせんきょうづかしゅつどこんしきんじきょう  
金峯山経塚出土紺紙金字経

一括

【所有者】宗教法人金峯神社（奈良県吉野郡吉野町吉野山 1651）

奈良県・山上ヶ岳山頂の大峯山寺山上本堂周辺に、主に平安時代に営まれた複数の経塚を総称して金峯山経塚という。

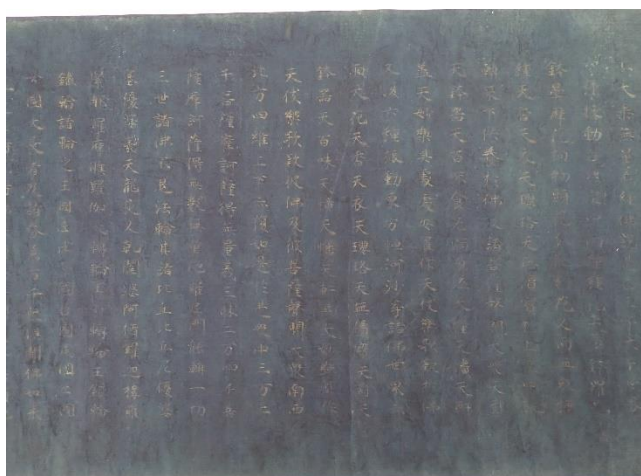
藤原道長（966～1027）は、寛弘4年（1007）に金峯山に参詣して、「金銅藤原道長経筒」（国宝・金峯神社所有）に自筆の法華経等 15 巻を収めて埋納した。経筒の銘文から、法華経等 10 巻は長徳4年（998）に書写し、残る 5 巻は寛弘4年に書写したことがわかる。

道長のひ孫にあたる藤原師通（1062～99）は、寛治2年（1088）に金峯山に詣でて自筆の法華経等 12 巻を埋納した。

道長願経は元禄4年（1691）出土と伝えられ、師通願経も明治時代の神仏分離以前に出土したと推測される。これらは各所に分蔵されているが、本経は 79 紙という金峯山寺所有の一群に次ぐ点数を誇り、また、他には小片 2 例しか伝わっていない表紙断簡 7 巻分も含まれており、我が国の文化史研究上、極めて価値が高い。（平安時代・10～11 世紀）



藤原師通筆  
紺紙金字経表紙



藤原師通筆 無量義経

(重要文化財を国宝に 1件)

きんぶせんきょうづかしゅつどこんしきんじきょう  
金峯山経塚出土紺紙金字経

一括

【所有者】宗教法人<sup>きんぶせんじ</sup>金峯山寺（奈良県吉野郡吉野町吉野山 2498）

奈良県・山<sup>さんじょう</sup>上ヶ岳<sup>がたけ</sup>山頂<sup>のおおみねさん</sup>の大峯山寺<sup>じさんじょうほんどう</sup>山<sup>さん</sup>上<sup>じょう</sup>本堂<sup>ほんどう</sup>周辺に、主に平安時代に営まれた  
複数の経塚を総称して<sup>きんぶせんきょうづか</sup>金峯山経塚という。

<sup>ふじわらのみちなが</sup>藤原道長<sup>みちながきょうづつ</sup>（966～1027）は、<sup>かんこう</sup>寛弘4年（1007）に<sup>きんぶせん</sup>金峯山に参詣して、<sup>こんどうふじわらの</sup>「金銅藤原  
道長経筒」（国宝・金峯神社所有）に自筆の法華経等15巻を収めて埋納した。  
経筒の銘文から、<sup>ちやうとく</sup>法華経等10巻は長徳4年（998）に書写し、残る5巻は寛弘  
4年に書写したこと等がわかる。

道長のひ孫にあたる<sup>ふじわらのもろみち</sup>藤原師通<sup>かんじ</sup>（1062～99）は、寛治2年（1088）に<sup>きんぶせん</sup>金峯山に  
詣でて自筆の法華経等12巻を埋経した。

道長願経は<sup>げんろく</sup>元禄4年（1691）出土と伝えられ、師通願経も明治時代の神仏分離  
以前に出土したと推測される。これらは各所に分蔵されているが、本経は200紙  
という最大の点数を誇り、<sup>きやうじく</sup>経軸や<sup>きやうちつ</sup>経帙も含まれており我が国の文化史研究上、  
極めて価値が高い。（平安時代・10～11世紀）



藤原道長筆 観普賢経卷末 長徳四年奥書

## ＜古文書の部＞

(重要文化財を国宝に 1件)

た が じょう ひ てんぴょうほう じろくねんじゅう に がつついたち  
多賀城碑〈天平宝字六年十二月一日ノ〉

1基

【所有者】国（文化庁保管）

【法 量】高さ 248 cm（地上部 196 cm） 最大幅 103 cm 最大厚さ 72 cm

多賀城碑は、多賀城跡の外郭南門に近い小丘陵上に、ほぼ真西向きに立っている。内容は、京など各地から多賀城までの距離、神亀元年（724）大野東人による多賀城の創建、天平宝字6年（762）藤原朝獯による修造などを記す。多賀城創建の年などは六国史にも記載がなく、貴重な史実を提供している。また碑の日付は朝獯が参議に昇任した日付であり、多賀城碑建立は多賀城の改修完成記念であるとともに、朝獯自身の顕彰的意味が強いとされる。

多賀城碑は奈良時代の同時代史料として、多賀城と古代東北史を解明するうえで、また奈良時代の政治情勢等を考えるうえでも、歴史的・学術的に特に重要な金石文であり、さらに数少ない奈良時代の石碑として非常に価値が高い。（奈良時代・8世紀）



画像提供：宮城県教育委員会

## ＜考古資料の部＞

(重要文化財を国宝に 1件)

み え けんたからづかいちごうぶんしゅつ ど はに わ  
三重県宝塚一号墳出土埴輪

一括

【所有者】松阪市（三重県松阪市殿町 1340-1）  
松阪市文化財センター保管

宝塚一号墳は、墳丘全長 111mを測る古墳時代中期前葉の前方後円墳である。平成 11 年に行われた発掘調査によって、主に船・冪・家などの多数の形象埴輪が出土した。なかでも埴輪船は全長 140 cm、高さ 94 cmを測る大形の埴輪で、遺存状態もきわめて良好である。準構造船を模したその造形は他例に抜きん出て精巧であり、船上に大刀、威杖、蓋などの別造りの威儀具を立てることも特徴的である。通常知ることが難しい古墳時代の大型船の具体的な姿をよく表し、葬送祭祀を考えるうえでも他に例がない。また、埴輪冪・家は導水施設および湧水施設を模したものとみられ、古墳時代に行われた水に関わる祭祀を復元するうえで高い学術的価値を有する。（古墳時代）



画像提供：松阪市

## 2. 重要文化財（美術工芸品）の指定

### <絵画の部>

（有形文化財を重要文化財に 10 件）

① 紙本 著色 天子撰関大臣影

4 巻

【所有者】国（文化庁保管、皇居三の丸尚蔵館収蔵）

【法 量】縦 28.7～29.1cm 長 46.6～1503.5cm

鳥羽院から後醍醐天皇までの天皇を描いた1巻と、同時期の摂政関白および大臣を描いた2巻に、後光厳天皇影1巻を加えた計4巻で構成される。奥書によれば、絵は藤原為信と子の豪信の筆という。その規模と出来栄えにおいて12世紀後半～14世紀前半に盛行した似絵を代表する作例であり、中世のやまと絵および肖像画を理解するうえで欠かせない重要作例である。（鎌倉・南北朝時代・14世紀）



画像提供：皇居三の丸尚蔵館

②紙本著色厩図〈六曲屏風〉

1双

【所有者】国（文化庁保管、皇居三の丸尚蔵館収蔵）

【法量】各 縦148.1cm 横308.2cm

古来馬は神の乗りものとされ、その所有者や奉納者の権威の証であった。本作は厩に並んだ駿馬を描いた屏風絵である。室町時代から江戸時代にかけての類例がいくつか知られるが、本作は現存最古級の厩図屏風で、類品中ひとときわ静粛な趣をたたえる。金も使用するものの、雲母と銀による白く柔らかな輝きを重視した絵作りは秀逸で、現存希な室町時代のやまと絵屏風を代表する作例のひとつに数えることのできる優品である。（室町時代・15世紀）



画像提供：皇居三の丸尚蔵館



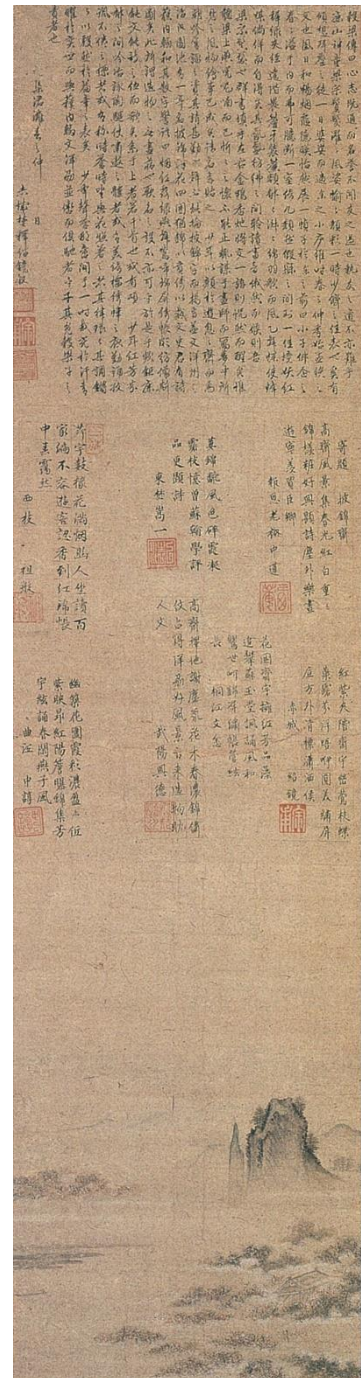
しほんぼくがたんさいひきんさいず  
 ③紙本墨画淡彩披錦斎図

1 幅

【所有者】公益財団法人根津美術館（東京都港区南青山 6-5-1）

【法 量】縦 114.6cm 横 27.5cm

爛漫の花をつけた木々に囲まれた一棟の書斎を描く。図上には鎌倉の禅僧 7 名による序と賛がある。序によれば、ある人が、円覚寺の童子に贈るべく、夢に見た光景を絵に描かせ、画中の書斎の命名と着賛を依頼したものという。絵は細やかな筆致と繊細な彩色が美しく、15 世紀なかば過ぎの鎌倉の地で京都風の強い絵画が享受されていたことを示す、重要な作例である。（室町時代・15 世紀）



画像提供：根津美術館

④<sup>しほんきんじちやくしよくひえさんのう</sup>紙本金地 著 色 日吉山王・<sup>ぎおんさいれいず</sup>祇園祭礼図 <sup>とさみつもちひつ</sup>〈土佐光茂筆 / <sup>ろっきよくびょうぶ</sup>六曲 屏風〉

1 双

【所有者】公益財団法人サントリー芸術財団  
(東京都港区赤坂 1-12-32 アーク森ビル 19 階)  
サントリー美術館保管

【法 量】各 縦 122.4cm 横 297.0cm

右隻に日吉社<sup>ひえしゃ</sup>の山王祭<sup>さんのうさい</sup>を、左隻に祇園会<sup>ぎおんえ</sup>を描く。このふたつの祭礼を主題とする屏風としては、現存最古例である。美しい彩色と豊かで精緻な風俗描写に優れ、祭礼の具体を詳細に伝えつつ、人々の熱狂をも巧みに描き出す。様式から土佐光茂(生没年不詳)が率いる工房の手による16世紀中頃の作と考えられる。近世初期風俗画につながる祭礼図屏風の古例として重要である。(室町時代・16世紀)



画像提供：サントリー美術館



⑤ <sup>けんほん</sup>絹本 <sup>しやくしやく</sup>著色 <sup>さんぞんぞう</sup>釈迦三尊像

1 幅

【所有者】宗教法人<sup>りんせんじ</sup>林泉寺（愛知県碧南市本郷町 3-8）  
碧南市藤井達吉現代美術館寄託

【法 量】縦 82.8cm 横 39.4cm

比較的小さな画面に朱衣の<sup>しゃか</sup>釈迦如来と白象に乗る<sup>ふげん</sup>普賢・青獅子に乗る<sup>もんじゆ</sup>文殊の  
両菩薩を描いた作例で、精緻な<sup>きりかね</sup>截金文様を多用し、繊細優美な画面に仕上げた優  
品である。平安時代末の美麗な趣を残す一方、鎌倉時代の傾向も看取される本作  
は、13 世紀後半には下らない作で、わが国の単幅の釈迦三尊画像としては古例  
に位置する重要作例である。欠失や補加筆が少なく、当初の姿をよく留める点で  
も価値が高い。（鎌倉時代・13 世紀）



画像提供：京都国立博物館

⑥<sup>しほんちやくしよく ゆぎょうしょうにん えでん</sup>紙本著色遊行上人絵伝

20巻

<sup>つけたり</sup>附 紙本著色遊行上人絵伝 <sup>かんだいはち</sup>(巻第八) 1巻

遊行上人絵伝 <sup>ことばがき</sup>詞書 10巻

【所有者】宗教法人金蓮寺（京都府京都市北区鷹峯藤林町1-4）

京都国立博物館寄託

【法量】縦33.6～33.8cm 長446.3～1050.8cm

<sup>じしゅう</sup>時宗の<sup>いっぺん</sup>開祖一遍（1239～89）と<sup>しんきょう</sup>二祖真教（1237～1319）の行状を描いた遊行上人絵伝は、14世紀初頭に原本が成立した。この原本は現存せず、本作を含めてそこから派生した作例から、その実態がうかがえるのみである。本作は、細緻な描写や画面構成の堅実さが現存作例中でひとときわ優れる。原本の絵画様式をよく伝え、おおむね首尾完結している点で貴重な作である。

（南北朝時代・14世紀）



画像提供：京都国立博物館

⑦<sup>けんほん ちゃくしよく ごひやくら かんず</sup>絹本著色五百羅漢図

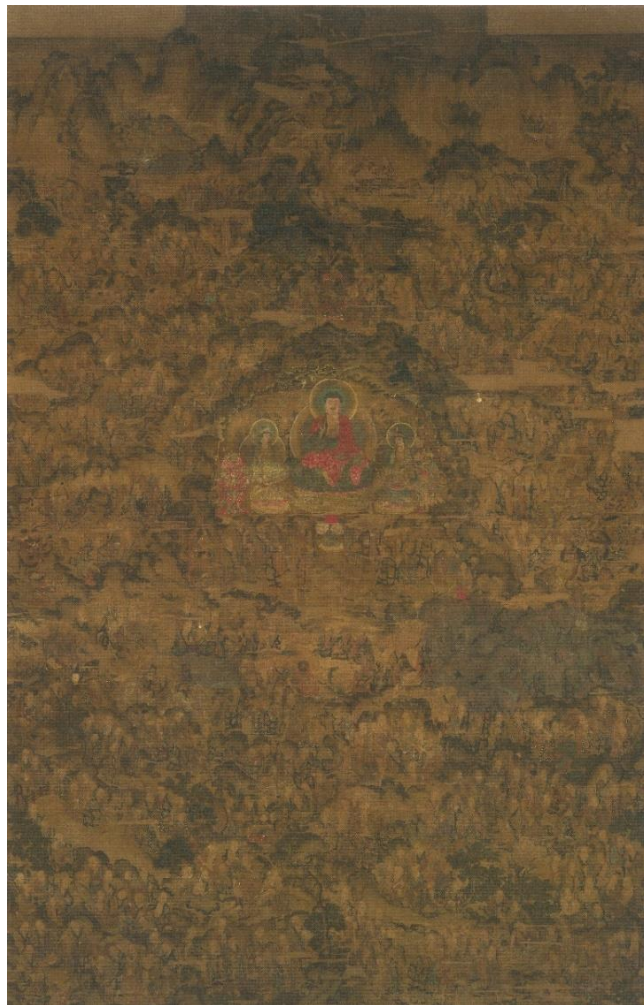
1 幅

【所有者】宗教法人知恩院（京都府京都市東山区林下町 400）

九州国立博物館寄託

【法 量】縦 188.0cm 横 121.4cm

山岳景観の中央に釈迦三尊、その周囲に二天王、十大弟子、十六羅漢、五百羅漢等をあらわした 1 幅。絵画様式から朝鮮半島の作と判断されるが、遅くとも江戸時代末には日本で中国画として尊ばれた。14 世紀末までに制作された東アジアの五百羅漢図は 5 例しか現存が確認されておらず、本作はそのなかで唯一、1 幅構成になる。五百羅漢図制作の時間的・空間的・思想的ひろがりをも具体的に考えるうえで欠くことのできない重要作である。（朝鮮・高麗時代・14 世紀）



画像提供：九州国立博物館

いた え きん じ ちやく ちよく つなぎう ます か の う さん せつ ひつ  
⑧板絵金地 著 色 繫馬図 〈狩野山雪筆〉

1 面

【所有者】宗教法人清水寺（京都府京都市東山区清水 1-294）

【法 量】縦 249.0cm 横 355.5cm

横 3.5 メートルを超える巨大な画面いっぱいに黒い駿馬しゅんめを描いた絵馬。もと清水寺本堂（国宝）に掲げられていたもので、京都で評判の大絵馬のひとつであった。筆者の狩野山雪（1590～1615）は肥前国（現在の佐賀県と長崎県の一部）出身で、狩野永徳（1543～90）の高弟として名高い山楽（1559～1635）の後継者である。山楽が没して2年後に奉納された本作は、強いエネルギーが行き場をなくして鬱屈うっくつしたような画風に特徴がある山雪の基準作として重要である。（江戸時代・寛永14年・1637）



⑨ <sup>は ごろもてんによ</sup>羽衣天女 <sup>ほん だ きんきちろうひつ</sup>〈本多錦吉郎筆 <sup>めい じ に じゅうさんねん</sup>明治二十三年 / <sup>あぶら え</sup>油絵 <sup>ま ふ</sup>麻布〉 1面

【所有者】兵庫県（兵庫県神戸市中央区下山手通 5-10-1）

兵庫県立美術館保管

【法 量】縦 127.3cm 横 89.8cm

明治23年(1890)の第3回<sup>ないこくかんぎょうはくらんかい</sup>内国勸業博覧会の出品作。作者の本多錦吉郎(1850～1921)は、広島藩士として洋学を学び、明治時代初のヨーロッパ留学生であった<sup>くにさわしんくろう</sup>国沢新九郎(1848～77)から油絵を学んだ早期の洋画家である。技法書の翻訳をはじめとして、日本における油絵の普及に大きく貢献した。本作は油絵が逆境におかれるなかで発表された意欲作で、西洋美術をふまえて日本の伝説を描いた作品として話題を集めた。日本の油絵の先駆的指導者である本多の代表作であり、技法や表現、題材など、明治時代の絵画の歴史を考えるうえで欠かせない作品である。(明治時代・明治23年・1890)



画像提供：兵庫県立美術館

⑩ <sup>な きりむら</sup>波切村 <sup>お の ちつきょうひつ</sup>〈小野竹喬筆 <sup>けんぼんちやくしよく</sup>絹本著色 <sup>よんきよくびょうぶ</sup>四曲屏風〉

1 双

つけたり <sup>が こう</sup>  
附 画稿

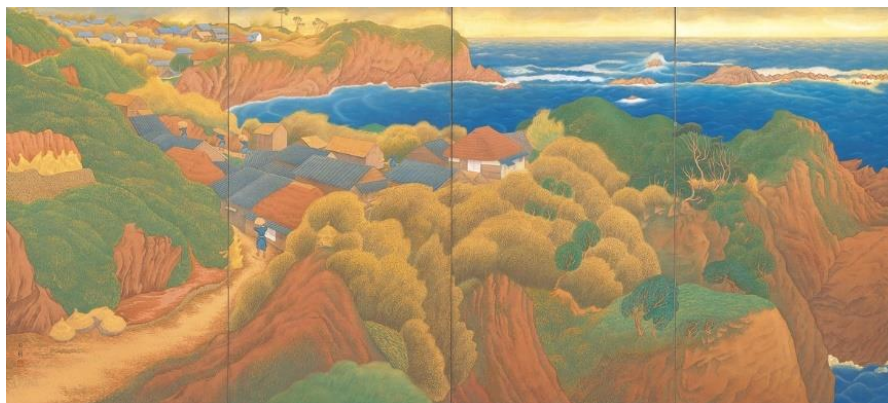
1 0 面

【所有者】 笠岡市（岡山県笠岡市中央町 1-1）

笠岡市立竹喬美術館保管

【法 量】 各 縦 167.7cm 横 368.5cm

岡山県笠岡市出身の小野竹喬（1889～1979）は近代を代表する日本画家で、風景画で名高い。本作は大正 7 年（1918）、竹喬ら 5 名の画家が<sup>こくが そうさくきょうかい</sup>国画創作協会を結成するにあたり、その第 1 回展で発表された大作である。竹喬はこの時期、東洋の古美術や西洋近代絵画に学びつつ日本画による風景表現の方向性を探求しており、多くの画家に影響を与えていた。本作は三重県の波切港を描いたもので、油絵を思わせる明るく雄大な景観描写はその模索の成果として示されたものである。竹喬の自信作であるとともに、記念碑的な作品であり、竹喬のみならず日本画の風景表現の展開を考えるうえで重要な位置を占める。（大正時代・大正 7 年・1918）



画像提供：笠岡市立竹喬美術館



## <彫刻の部>

(有形文化財を重要文化財に 5件)

### ①木造如来立像 (法隆寺献納)

1 軀

【所有者】独立行政法人国立文化財機構 (東京都台東区上野公園 13-9)

東京国立博物館保管

【法 量】像高 44.5 cm

法隆寺に伝来して皇室に献納された、いわゆる法隆寺献納宝物に含まれる如来立像で唯一の木彫仏。クスノキの一材より本体及び台座を彫出する。クスノキを用材とするのは飛鳥時代の木彫像に共通するもので、衣の下の肉身部をなだらかな起伏で表す点や衣文線を陰刻線で表すことなどから 7 世紀末頃の製作と考えられる。遺品の稀少な飛鳥時代の木彫像であり、当初の光背を遺す点も貴重である。(飛鳥時代・7 世紀)



画像提供：東京国立博物館

② <sup>もくぞう ござてんのうざぞう</sup>  
木造牛頭天王坐像

1 軀

<sup>もくぞうじょしんざぞう</sup>  
木造女神坐像

1 軀

【所有者】宗教法人<sup>やさかじんじゃ</sup>八坂神社（福井県丹生郡越前町天王 18-24）

【法 量】像高 牛頭天王 63.8 cm

女神 62.3 cm

<sup>こう</sup>甲を着け<sup>ぎゅうとう</sup>頭上に牛頭を戴き<sup>さんめんじゅうにひ</sup>虎に坐る三面十二臂の牛頭天王像と<sup>とうそう</sup>唐装で頭に十一面を戴く<sup>いちぼくづくり</sup>女神坐像。各針葉樹材の一木造で、作風より12世紀後半の製作と推定される。牛頭天王像は八坂神社本殿、女神像は境内の<sup>せつしゃ</sup>摂社に伝来した。大きさ（坐高）がほぼ同じで、作風や構造技法が共通することから両像は一具として製作されたとみられ、女神像は八坂神社の祭神の一つで十一面観音を本地仏とする<sup>はくさんみょうりごんげん</sup>白山妙理権現である可能性や、牛頭天王の後である<sup>はりめ</sup>婆利女である可能性が考えられる。牛頭天王像はその現存作例中、最も本格的な彫像で出来映えが優れる。女神像は頭部を十一面観音に表すなど神仏習合の彫像の展開を考えるうえで注目される。（平安時代・12世紀）



女神坐像



牛頭天王坐像

③<sup>なぜんじでんらいしよぞう</sup>南禅寺伝来諸像

26 軀（附・15 軀含む。）

【所有者】<sup>やつく</sup>谷津区（静岡県賀茂郡河津町谷津）

【法 量】像高 薬師如来 117.7 cm

十一面観音その 1 188.5 cmほか

<sup>なぜんじどう</sup>南禅寺堂と呼ばれる堂に伝来した 26 軀からなる木彫群で、堂の本尊、薬師如来像をはじめ、大半が 10～11 世紀の製作になり、<sup>ごほうしん</sup>仏・菩薩・護法神など当時の堂宇に安置される主要な<sup>そんかく</sup>尊格が揃う。いずれも一木造<sup>いちぼくづくり</sup>で仏像は基本的にカヤ材、神像はクスノキ材を用いる。各像間で作風や製作技法に共通点が認められることから、同系統の工房が当地において継続して造像を行ったことが推定される。平安時代の地方における造像のさまを如実に伝える遺品として重要である。また十一面観音像の一軀は素朴な作風であるが、カヤ材の一木造で各所に古様<sup>こよう</sup>を示すことから、奈良時代に遡る製作とみられる。（奈良時代・平安時代 8 世紀・10～11 世紀）



薬師如来



二天王その 1



十一面観音その 1

- ④ <sup>もくぞう あみだによらいりゅうぞう かいけいさく</sup> 木造阿弥陀如来立像 〈快慶作／〉 1 軀
- <sup>もくぞう じぞう ぼさつりゅうぞう</sup> 木造地藏菩薩立像 1 軀

【所有者】宗教法人<sup>あんらくじ</sup>安楽寺（三重県松阪市安楽町 31）

【法 量】像高 阿弥陀如来 78.2 cm

地藏菩薩 52.1 cm

阿弥陀如来像は左足柄<sup>ひだりあしほぞ</sup>に墨書銘があり、削られて判読困難ながら<sup>ざんかく</sup>残画や他像との比較から<sup>ほうげんかいけいめい</sup>法眼快慶銘と推定され、快慶が<sup>ほうげんい</sup>法眼位にあった時期（1208 年頃～1227 年以前）の製作であることが判明する。快慶が多数製作したことが知られる三尺阿弥陀像中の優品と評価される。地藏菩薩像は足柄に削り直しがあり、本来銘文が記されていたか不明であるものの、やはり快慶法眼期の作風を示し、快慶の作と推定される。表面に施された<sup>さいしきもんよう</sup>彩色文様もよく残り繊細な趣が認められる。地藏菩薩像の台座に銘文（江戸時代の修理銘）があり、かつて奈良眉間寺<sup>みけんじ</sup>（廃絶）に伝来したことが知られる。阿弥陀如来と地藏菩薩は両者の大きさの関係や作風の共通点から当初は阿弥陀三尊像<sup>あみださんぞんぞう</sup>の中尊と脇侍<sup>ちゅうそん きょうじ</sup>であった可能性がある。（鎌倉時代・13 世紀）



地藏菩薩立像



阿弥陀如来立像

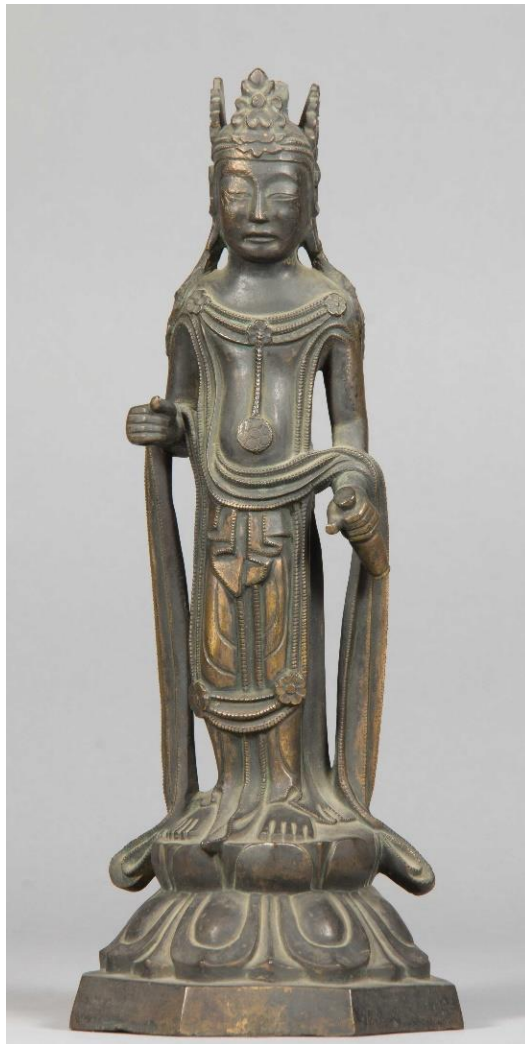
⑤ <sup>どうぞうかんのんぼさつりゅうぞう</sup>銅造観音菩薩立像

1 軀

【所有者】 <sup>ほうりゅうじ</sup>宗教法人法隆寺（奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺山内 1-1）

【法 量】 像高 29.0 cm

現在、<sup>たまむしずし</sup>玉虫厨子（国宝）に安置される観音菩薩像で本体及び台座を銅で<sup>いっぢゅう</sup>一鑄する。正面に<sup>けぶつ</sup>化仏を戴く<sup>さんめんとうしよく</sup>三面頭飾付きの冠を付け、<sup>どうがんだうぎょう</sup>童顔童形の姿に表される飛鳥時代後期の<sup>しょうこんどうぶつ</sup>小金銅仏である。奈良 <sup>さくらもとぼう</sup>桜本坊如来坐像（重要文化財）などと同じる作風を示しており、<sup>めんぼう</sup>面貌や着衣表現の特徴から 7 世紀末頃の製作と考えられる。両足間に尖頭状に突き出る衣の表現など着衣形式に特徴が認められる。法隆寺に伝来した飛鳥時代の小金銅仏であり、当代の金銅仏の形式展開を考えるうえで注目される。（飛鳥時代・7 世紀）



## <工芸品の部>

(有形文化財を重要文化財に 6件)

### ①銅色絵太平楽置物どういろ えたいへいらくおきもの うんのしょうみんさく〈海野勝珉作／〉

1 軀

【所有者】国（文化庁保管、皇居三の丸尚蔵館収蔵）

【法 量】高 46.0 cm 幅 21.0 cm 奥行 42.0 cm

1900年パリ万国博覧会出品のため宮内省より製作を依頼された作品。舞楽ぶがく太平楽の演者の姿を鍛金たんきんおよび彫金ちようきんの技法で表現している。宮内省雅楽寮ががくりょうの楽人がくをモデルに詳細なスケッチを行ったうえで、伝統的な装剣金具そうけんかなぐの技法に依拠し、様々な色金いろがねを用いて装束しょうぞくの各部を細密かつ装飾的に表現している。また、顔貌の細部や衣装の量感、人体のプロポーションにも気を配り、西洋彫刻的な立体表現がなされている。本作の10年ほど前に作られた、銅色絵蘭陵王置物どういろ えらんりょうおうおきもの（重要文化財）と並び称される、海野勝珉の代表作である。

この置物は、工芸家が博覧会という場で、日本の文化的優位性を諸外国へ印象づけるための表現を追い求めた時代を代表する作品であり、その彫金技術の高さと表現力の豊かさが際立つ重要作である。（明治時代・明治32年・1899）



画像提供：皇居三の丸尚蔵館

②<sup>きくまきえ らでんしよだな まきえ かわの べいっちょうさく かなぐ うんのしょうみんさく</sup>菊蒔絵螺鈿書棚〈蒔絵 川之邊一朝作、金具 海野勝珉作〉1基

つけたり <sup>きくまきえ らでんいりおんしよだなせいさくず</sup>  
附 菊蒔絵螺鈿入御書棚製作図

45枚

【所有者】国（文化庁保管、皇居三の丸尚蔵館収蔵）

【法量】高122.0cm 幅135.5cm 奥行46.6cm

総体に<sup>きんまきえ らでん</sup>金蒔絵と螺鈿で加飾をした書棚である。棚全体に金を蒔き詰めた地に、金高蒔絵と螺鈿で、群菊とその間を飛び回る小鳥を表す。漆工品としては大型の器物である棚の総体を、隙間なく加飾する密度の高い意匠としながら、蒔絵と螺鈿、金具に至るまで破綻なく表現している。

本作は、明治25年（1892）に宮内省にて明治天皇の<sup>ぎよぶつ</sup>御物とすることを目的として、約11年の歳月をかけて製作された3件のひとつである。製作の指揮をとった蒔絵の<sup>かわの べいっちょう</sup>川之邊一朝ほかに<sup>ろっかくしすい</sup>下絵は六角紫水、<sup>うんのしょうみん</sup>金具は海野勝珉が手掛けた。本作は、明治期の工芸技術の実力者が集められて製作にあたった基準作であり、工芸技術の粋をうかがわせる代表的な作品として重要である。また、製作の経緯を詳細に知ることができる点も資料的価値が高い。

（明治時代・明治36年・1903）



全図



部分

画像提供：皇居三の丸尚蔵館

③ こそできれぼん 小袖裂幡

3 旒

つけたり もえぎ じ ふじなみおけもんようしほりそめぼんざんけつ  
附 萌葱地藤波桶文様 絞染幡残闕

4 枚

ばん ゆらいしよ  
幡由来書

1 枚

【所有者】 国（文化庁保管）

【法 量】 もえぎ じ ふじなみおけもんようしほりぞめぼん 萌葱地藤波桶文様 絞染幡 幡身縦 78.0cm 同幅 31.0cm、

こんじ かえでたけもんようしほりぞめぼん 紺地楓竹文様 絞染幡 幡身縦 92.5cm 同幅 29.5cm、

くれないすじしほりぞめ こうはくこうし おりぼん 紅筋絞染・紅白格子織幡 幡身縦 95.5cm 同幅 28.0cm

かつて衣服として着用された小袖の裂を縫い繋いで仕立てた幡である。絞染しほりと織おりの様々な生地が使われており、複数の人物の小袖裂から成ると考えられる。由来書によれば、この幡は根来寺ねごろじの僧侶により享禄元年から3年（1528～30）にかけて作られ、これを見る人に一切の罪業を取り除く光明真言こうみょうしんごんの功德くどくがあることを願ったことが知られる。室町時代の染織せんしよく技法や小袖意匠、幡の製作背景をうかがうことができ、当該期染織品の基準作となる重要な作品である。（室町時代・16世紀）



萌葱地藤波桶文様 絞染幡



紺地楓竹文様 絞染幡



紅筋絞染・紅白格子織幡

画像提供：京都国立博物館



あかじ ぼたんからくきもんにしきひたれ  
④ 赤地牡丹唐草文 錦直垂

1 領

つけたり あかじ ぼたんもんにしきはた  
附 赤地牡丹文 錦旗

1 旒

ゆかわそうこうゆずりじょう  
湯川宗光 讓状

1 通

【所有者】独立行政法人国立文化財機構（東京都台東区上野公園 13-9）

東京国立博物館保管

【法 量】直垂 身丈 77.0cm 衿 91.0cm、袴 総丈 99.0cm 腰幅 51.0cm

あかじにしきひたれ  
赤地 錦直垂は大将級の武将がよろいした鎧下に着用する衣服として知られる。錦直垂、にしきはた錦旗の使用にあたっては朝廷や将軍家等からの許可を必要とし、家の格式や由緒を語る上で重要であった。あしかがよしもち うらがきあんど足利義持の裏書安堵を伴う讓状から、応永22年（1415）に本直垂と旗がゆかわそうこう ちやくし みつはる湯川宗光から嫡子の満春に譲られたことが知られる。本直垂と旗には日本製の錦が用いられている。直垂の形態は日常に着用する直垂に近い形をとっており、よろいひたれ鎧直垂として体に沿う形態に変化する前の古様な例と見られる。この時代に遡る遺例はけう稀有であり、中世の直垂、せんしよく染織技法を知るうえで重要な資料である。（南北朝～室町時代・14～15世紀）



画像提供：東京国立博物館

⑤	ひやくそうまきえくすりたんす いろいろかとうようさく 百草蒔絵薬箆筒〈飯塚桃葉作／〉	1基
}	ないようひん 内容品	一括
	つげたり だいおんやくろうちゅうひんるいもくろく 附 大御薬籠中品類目録	1冊

【所有者】公益財団法人根津美術館（東京都港区南青山 6-5-1）

【法量】高 31.5 cm 縦 24.0 cm 横 41.8 cm

けんどんぶたづくり たんす しぶがみ ごうす がら  
慳貪蓋造の箆筒である。内部の引出には、渋紙製の薬袋や銀製の合子、硝  
す 子製の薬瓶、しんきゆう  
鍼灸の道具などを納める。

箆筒は、総体を研出蒔絵の技法で装飾しており、器表および引出の前面は不  
規則に区分けし、その各部に異なる文様を配した、よせぎれ  
寄裂風の意匠である。蓋の  
裏にははっか かっこん かまきり  
薄荷や葛根、蟻螂など薬効のある百種の草虫を全面に表す。細密な草虫  
の描写や、奥行きのある蒔絵の表現は秀逸である

作者の飯塚桃葉（不詳～1789）は、かんしょうさい  
観松斎と号した江戸中期を代表する蒔  
絵師の一人で、徳島藩蜂須賀家に抱えられた。本作は桃葉の基準作であり、代  
表作である。

かつ、銀製合子をはじめとする内容品も充実しており、意匠、製作技術とも  
に優れている。また、当時の医療品の事情を知る資料としても価値が高い。

（江戸時代・明和8年・1771）



薬箆筒／内容品



蓋裏

画像提供：根津美術館

⑥ こんどううんりゅうもんかんざし 金銅雲龍文簪

1本

【所有者】 沖縄県（沖縄県那覇市泉崎 1-2-2）

沖縄県立博物館・美術館保管

【法 量】 長 27.0 cm カブ径 10.8 cm

どうせいと きん 銅製鍍金。カブと呼ばれる頭部と、くき 茎部から成る。カブには玉を手取る二頭の龍がめぐるさまを立体的に彫金する。ちようきん 聞得大君御殿きこえ おおきみ う どうんに伝来し、琉球王府の祭祀を司る最高位のしんじよ 神女、きこえ おおきみ 聞得大君が使用した簪とされている。18世紀に編纂された『きゆうよう 球陽』に記される、おうごんりゅうはなのおおかんざし 聞得大君と王妃が身につけるべき「黄金龍花大簪」に当たる。また本品には、琉球王府伝来の遺品に多く見られる「天」の字を形象化した印が刻まれる。

沖縄各地に残る神女簪の中でも、もっとも古い時代の一群に属し、また他の作例と比べて本品のみが二回りほど大きく、作行きも特に優れている。琉球の金工品のなかでも特筆すべき重要な作品である。（第二尚氏時代・16～17世紀）



画像提供：沖縄県立博物館・美術館

<書跡・典籍の部>

(有形文化財を重要文化財に 2件)

①元版一切経

2, 892帖

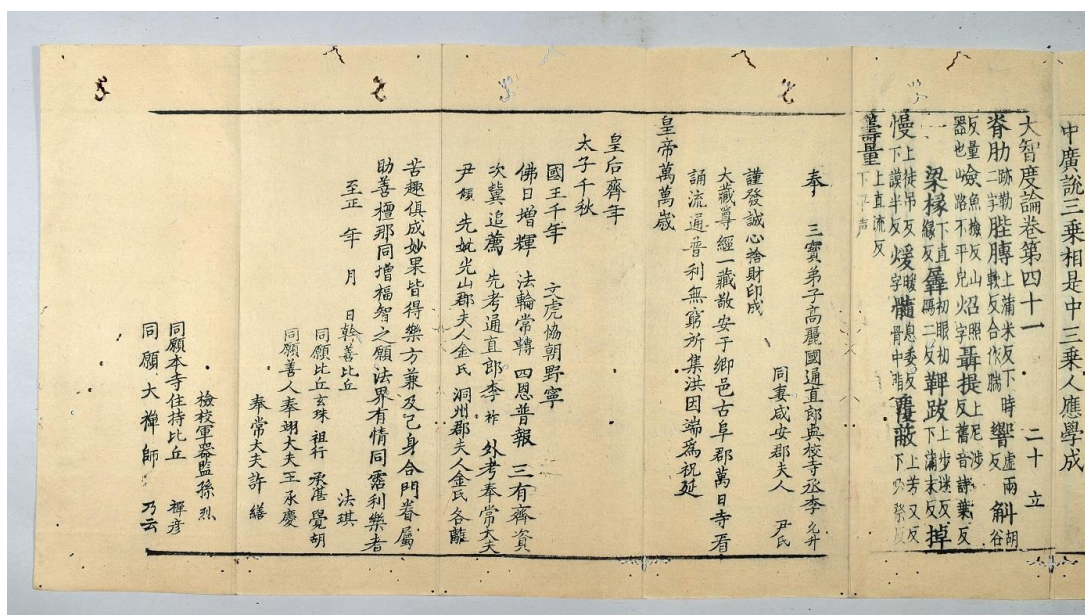
附 以下略

【所有者】宗教法人園城寺 (滋賀県大津市園城寺町 246)

園城寺 (三井寺) に伝来した一切経 (大蔵経) で、中国・元時代に印刷された普寧寺版という経典を主体とし、一部が朝鮮時代の高麗版と室町時代の書写本の経典によって補われている。

もとは14世紀に高麗の官人等が元の普寧寺に依頼して印刷し、高麗の寺院に納められたものであったが、15世紀前半に周防国を拠点としていた大内氏の求めにより朝鮮から日本へともたらされたと考えられている。慶長7年(1602)に園城寺の復興事業に携わっていた毛利輝元によって寄進された。

元版一切経の大部と、経典と一具であった元代の経箱がまとまって伝存しており、伝来過程が明らかにできることから、我が国の仏教史、東アジア文化交流史上、きわめて価値が高い。(中国・元時代・14世紀)



大智度論卷第四十一 (立一) 卷末と願文

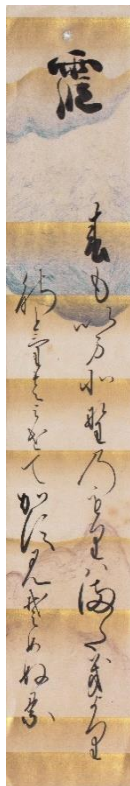
附 以下略

【所有者】宗教法人北野天満宮（京都府京都市上京区馬喰町）

江戸時代を通じて、『古今和歌集』の難解な歌や語句の解釈を伝承する古今伝授を契機として、天皇・上皇等から歌神である北野天満宮（聖廟）に奉納された法楽和歌である。

奉納されたのは、天皇・上皇と親王や公家衆が君臣一体で詠み認められた和歌短冊と和歌卷子本であり、本殿に納められ、社宝として大切にされてきたため、附属する奉納箱や歌題目録等も含めて、ほぼすべてが良好な状態で残っている。

御所における古今伝授の一過程をよく伝えるものであり、奉納当時の姿をほぼ完全に留めている点で学術的に貴重であり、我が国の文化史や和歌研究史上、きわめて価値が高い。（江戸時代・17～19世紀）



聖廟月次御法楽和歌巻上 巻首（靈元法皇奉納）

和歌短冊

左 寛文四年後西上皇奉納和歌

右 明和四年後桜町天皇奉納和歌

画像提供：北野天満宮

## ＜古文書の部＞

(有形文化財を重要文化財に 5件)

### ①多賀城関連遺跡群出土木簡

105点

【所有者】多賀城市（宮城県多賀城市中央2-1-1）  
多賀城市埋蔵文化財調査センター保管

陸奥国府・鎮守府であった多賀城には、南方の城外地域にも国府域こくふが広がっている。ここには、奈良時代から平安時代にかけて、集落や方格に区画された町並みが形成された。多賀城関連遺跡群とは、この城外地域の山王遺跡さんのう いせきと市川橋遺跡いちかわばし いせきを指す。木簡の内容は、荷札や付札にふだ つけふだ、文書木簡、題籤軸だいせんじく、習書しゅうしょなどである。荷札、付札の地名では現在の宮城県・福島県が、品目では米が中心であるが、保存食品、調度品、繊維製品や馬もみられる。また題籤軸木簡では「右大臣殿 餞馬う だいじんどの せんば 収文しゅうもん」の文字が特に注目され、出土地は陸奥守むつのかみの邸宅跡であろうとされた。

本木簡は、古代の多賀城にもたらされた物品や朝廷と多賀城の具体的な関わりを示しており、東北古代史および社会経済史研究においても、たいへん貴重である。(奈良～平安時代・8～11世紀)



(裏)



(表)

「右大臣殿 餞馬収文」題籤軸

画像提供：多賀城市教育委員会

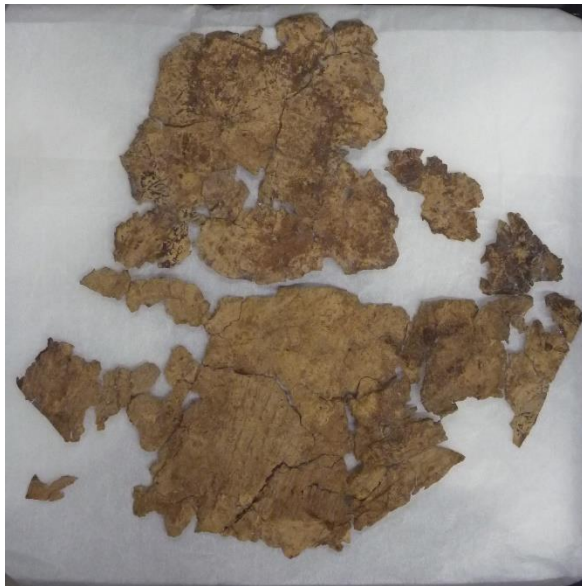
②<sup>た が じょうかんれん い せきぐんしゅつ どうるしがみもんじょ</sup>多賀城関連遺跡群出土漆紙文書

29点

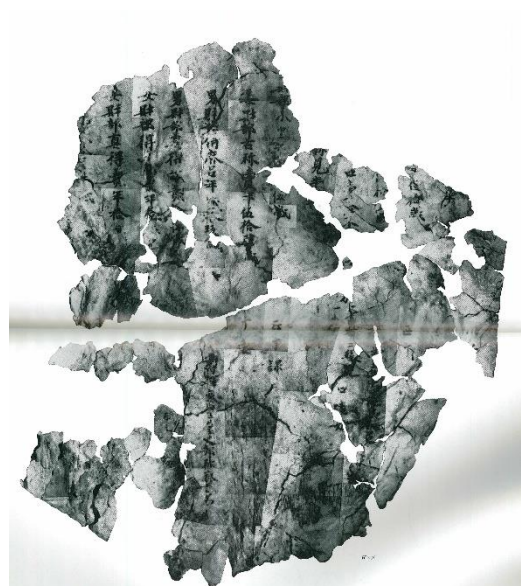
【所有者】多賀城市（宮城県多賀城市中央2-1-1）  
多賀城市埋蔵文化財調査センター-保管

多賀城南方の<sup>こくふ</sup>国府域には、奈良時代から平安時代にかけて、集落や方格に区画された町並みが形成された。多賀城関連遺跡群とは、この城外地域の<sup>さんのう い せき</sup>山王遺跡と<sup>いちかわばし い せき</sup>市川橋遺跡を指す。一般に漆紙文書とは、<sup>うるしえき</sup>漆液が乾かないよう漆容器の蓋紙として再利用された<sup>こもんじょ</sup>古文書に漆が染みこみ、地中で腐らずに残ったものである。本漆紙文書の内容は、<sup>せきしょうい</sup>籍帳類、<sup>こよみ</sup>帳簿、<sup>きゅうしや</sup>暦、<sup>こくし げあん</sup>厩舎修理報告にかかる<sup>うまや</sup>国司解案や国内でのやり取りに用いられた文書などである。特に籍帳類の中には<sup>うまや</sup>駅家経営の人員確保に関わるものなど、古代の籍帳制度や交通制度研究においても重要な史料がある。

本漆紙文書は、陸奥の国務に関わる貴重な史料を提供するとともに、東北古代史研究のみならず、古代の籍帳制度や交通制度および都市の研究においても、たいへん貴重である。（奈良～平安時代・8～11世紀）



計帳歴名



赤外線写真

画像提供：多賀城市教育委員会

③中山法華經寺文書なかやま ほ けきょう じ もんじよ（八百三十九通） 17巻、106冊、4幅、  
689通、5鋪、6綴、3枚

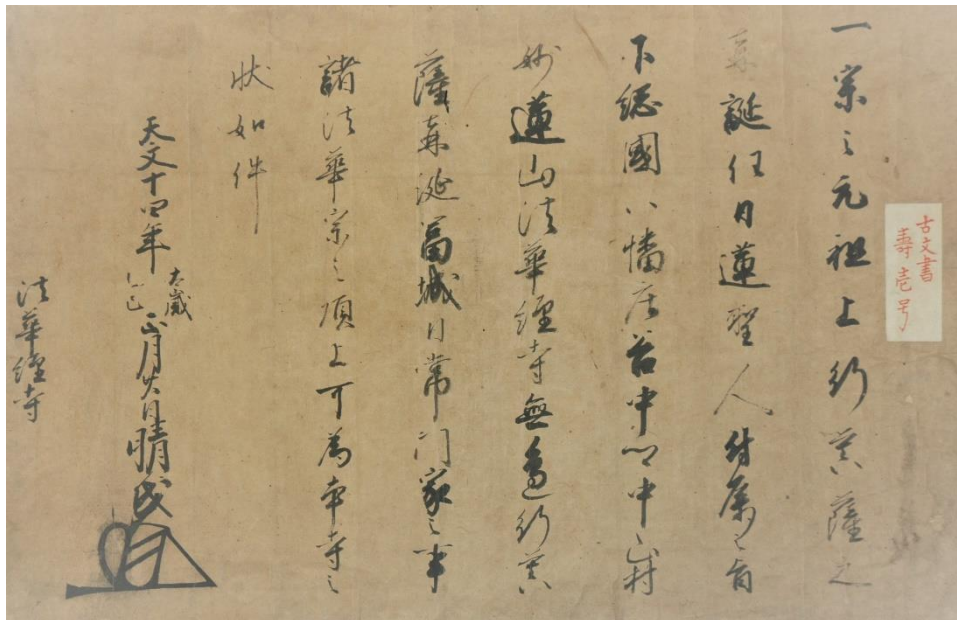
【所有者】宗教法人法華經寺（千葉県市川市中山2-10-1）

中山法華經寺文書は、日蓮にちれんの弟子富木常忍と き じょうにん（法号日常にちじょう、1216～99）が開創した中山法華經寺に伝来した文書であり、中世文書と近世文書からなる。

中世文書は、歴代の貫首かんじゆが寺内の規則おきぶみを記した置文じりょうや寺領きしんに対する寄進きしん状、安堵状あんどじょう、朱印状しゆいんじょうなど中山法華經寺の運営や寺領に関わる文書が中心である。

近世文書は、寺院の歴史をまとめた要録ようろくや法事の費用をまとめた帳簿おくじよ、奥女おくじよ中の参詣ちゆうに関する書状など多様な文書がある。

本文書は、日蓮宗や武家勢力の伸張を研究するための基礎史料として学術的価値が高く、我が国の寺院史や東国武家史などを研究するうえで、たいへん重要である。（鎌倉～明治時代・13～19世紀）



足利晴氏安堵状



④<sup>さいふくじもんじよ</sup>西福寺文書（五百五十六通）

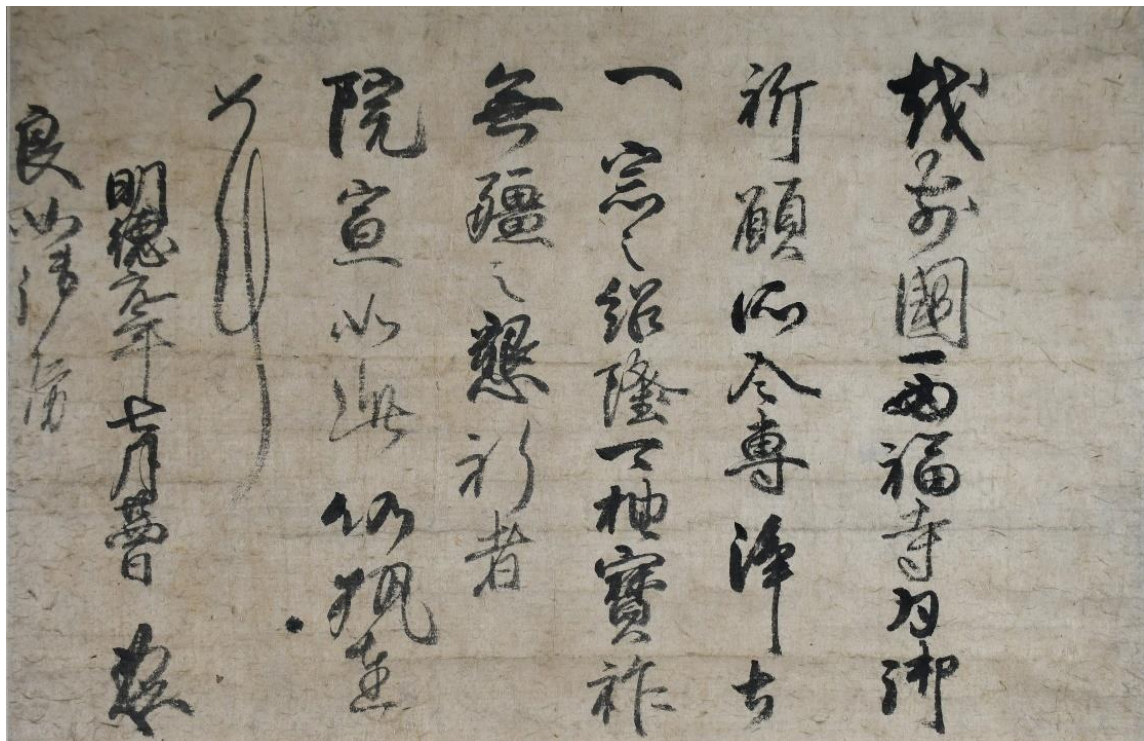
26巻、163冊、1帖、

32幅、59通、1綴、7枚

【所有者】宗教法人西福寺（福井県敦賀市原13-7）

西福寺文書は、<sup>おうあん</sup>応安元年（1368）に<sup>りょうによ</sup>良如（1344～1412）が開創した浄土宗寺院の文書である。鎌倉時代から安土桃山時代にかけて、寺領形成過程を明らかにする文書や、<sup>ごえんゆう</sup>後円融上皇、<sup>あしかがよしもち</sup>足利義持等の祈願所であること、<sup>あさくら</sup>朝倉氏、織田信長等による地域支配の実態を示す文書など、豊富な内容を持つ。江戸時代においても、<sup>しんぱん</sup>親藩や譜代の大名による寺領保護、<sup>えちぜん</sup>越前、<sup>わかさ</sup>若狭、<sup>おうみ</sup>近江に多く所在した末寺との関係等を示す文書を数多く含む。

中世以来の浄土宗寺院文書がまとまって伝来する事例は少なく、戦前から研究が蓄積されてきた。我が国の政治史、経済史、文化史等の各分野研究上、価値が高い史料群である。（鎌倉～明治時代・14～19世紀）



後円融上皇院宣

画像提供：福井県教育委員会

⑤<sup>あおかたもんじよ</sup>青方文書（三百八十五通）

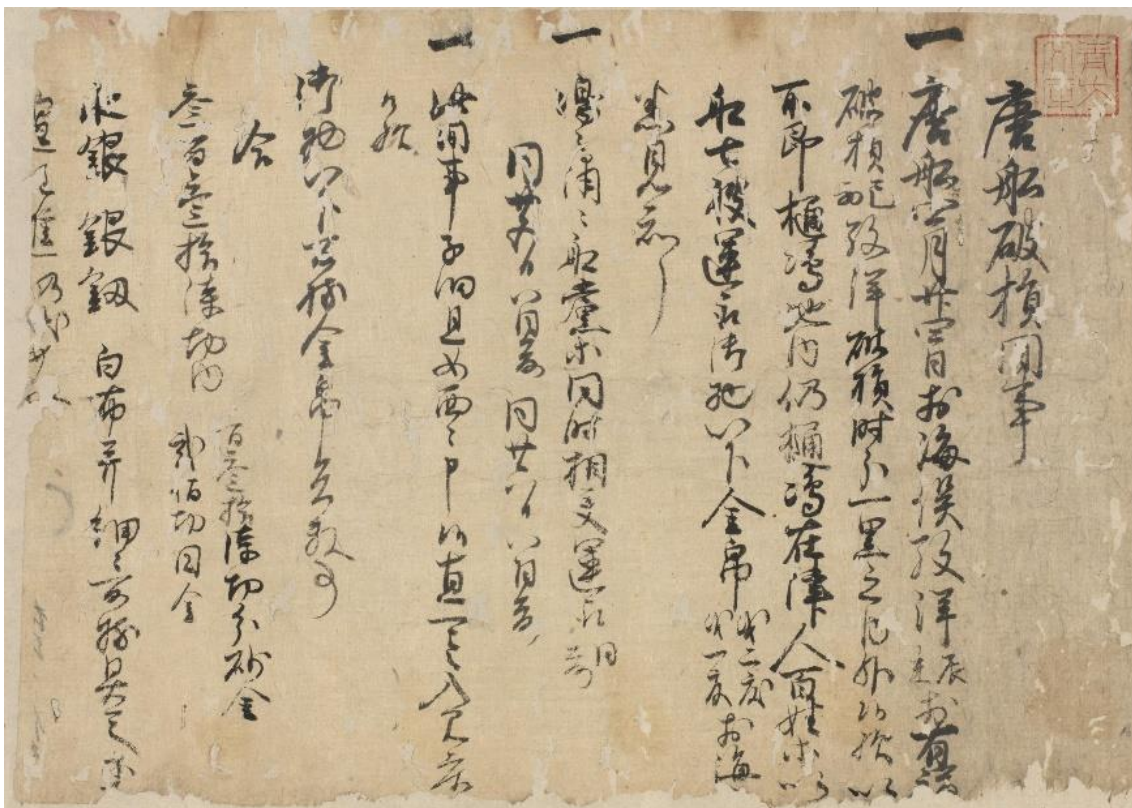
73巻、70通

【所有者】長崎県（長崎県長崎市尾上町3-1）  
長崎歴史文化博物館保管

本文書は、<sup>かみごとう</sup>上五島地方に平安時代以来居住した青方氏のもとに伝来した文書である。青方氏は、鎌倉時代初期に幕府<sup>ごけにん</sup>御家人となった一族であり、江戸時代には五島藩の家老<sup>かろうしよく</sup>職を務めている。

本文書の内容は、青方氏一族の<sup>しよりょう</sup>所領をめぐる訴訟に際して作成された文書、<sup>いこくけいごばんやく</sup>異国警固番役などの勤務記録、鎌倉時代後半に中国大陸に輸出された品目の注文、<sup>こくじんいつき</sup>国人一揆が百姓支配などに関して協力することを誓約した契状<sup>けいじょう</sup>など多岐にわたり、多くの研究で利用されている。

本文書は、青方氏一族の史料が鎌倉時代以降まとまって伝来し、豊富な内容を持つという点で学術的価値が高く、<sup>さいごく</sup>西国武士研究や<sup>かいじし</sup>海事史・対外交易史研究上、たいへん重要である。（鎌倉～江戸時代・13～17世紀）



関東使者義首座注進状案  
画像提供：長崎歴史文化博物館

## <考古資料の部>

(有形文化財を重要文化財に 6件)

### ①北海道西島松5遺跡出土品

一括

【所有者】 恵庭市（北海道恵庭市京町1）

恵庭市埋蔵文化財整理室保管

遺跡は石狩平野のほぼ中央、千歳川に注ぐ柏木川沿岸の台地上に立地する。擦文時代の墓跡が多数確認され、それらに伴う豊富な副葬品が出土した。なかでも土坑墓から出土した副葬品は多様であり、北海道中央部の独特な墓制をよく示す。特に、大刀や刀子、鉄鏃、工具類などの鉄製品が豊富であり、道内諸遺跡の出土品と比べ、その内容は群を抜く。また、副葬品の一部には装飾付大刀や蕨手刀など本州で製作されたとみられる製品が含まれており、当時の人々が伝統的な墓制を守りながら、本州と交流していた状況をよく表している。これらは、擦文時代前半における、北海道中央部と東北地方北部や律令政府との政治的、社会的な関係性を考えるうえで重要である。（擦文時代）



画像提供：恵庭市

みやぎけん たがじょうあとしゅつどひん  
②宮城県多賀城跡出土品

一括

【所有者】宮城県（宮城県仙台市青葉区本町 3-8-1）

宮城県多賀城跡調査研究所・東北歴史博物館保管

多賀城跡は、<sup>むつこくふ</sup>陸奥国府・<sup>ちんじゆふ</sup>鎮守府が置かれ、古代国家における北辺の政治の中枢であり、軍事の要でもあった古代城柵跡である。多賀城跡を構成する遺跡・遺構群から出土した瓦、<sup>すずり</sup>硯や墨書土器、祭祀具、武器・武具、生産関連用具など多彩な資料が含まれ、多賀城にあった政務機関や寺院等の性格や機能を示し、そこに出仕した官人の用務や生活を復元しうる代表的な遺物である。古代国家における枢要な地方官衙の<sup>かんが</sup>具体像を示す一括資料であり、きわめて学術的価値が高い。（奈良・平安時代）



画像提供：宮城県教育委員会

③<sup>ふくしまけんてんのうやま いせきしゆつ ど ひん</sup>福島県天王山遺跡出土品

一括

【所有者】白河市（福島県白河市字八幡小路 7-1）

白河市歴史民俗資料館保管

天王山遺跡は、阿武隈川左岸の丘陵上に所在する高地性の集落遺跡で、出土した土器の多くには、刺突文を交互上下に入れて波状沈線様とする交互刺突文、縄文時代晩期にみられる変形工字文や磨消縄文などの特徴的な文様が施される。これらは「天王山式土器」と命名され、弥生時代後期前半の東北地方を代表する標式資料として、学術的・学史的に重要な土器群となっている。また石器・石製品には、アメリカ式石鏃<sup>せきぞく</sup>と呼ばれる特徴的な形状の石鏃や、環状石斧<sup>かんじょうせきぶ</sup>、管玉<sup>くだたま</sup>等が含まれ、その内容は多彩である。東北地方における弥生時代研究史上重要な資料であり、当該期における土器・石器の特色をよく示した重要な一括として、高い学術的価値を有する。（弥生時代）



画像提供：白河市

④<sup>とちぎけんかみこうぬし もばらかんが いせきしゆつどこくしよがわら</sup>栃木県上神主・茂原官衙遺跡出土刻書瓦

1, 4 6 1 点

【所有者】宇都宮市・上三川町

(栃木県宇都宮市旭 1-1-5・栃木県河内郡上三川町しらさぎ 1-1)  
とびやま歴史体験館保管

上神主・茂原官衙遺跡は、宇都宮市茂原町と上三川町上神主にまたがる、飛鳥時代後半から平安時代前期にかけて営まれた郡衙跡とみられ、8世紀後半の礎石瓦葺建物跡（東西31m・南北9m）から多量の刻書瓦が出土した。釈読できた刻書はほとんどが人名で、主に当時の郷名や地名と共通する氏、および個人の名が刻まれている。こうした文字瓦が官衙跡からまとまって出土することは全国的にも稀少である。

これらは、官衙運営の中心を担った礎石瓦葺建物に伴う瓦生産とその供給に際しての、河内郡内に居住した氏族の関わり方を解明するうえで重要である。わが国の古代官衙跡における瓦の生産・供給の在り方を窺い知ることができる一括資料として、その学術的価値は高い。（奈良時代）



画像提供：宇都宮市・上三川町

ちばけんとのづかこふん ひめづかこふんしゅつどはにわ  
⑤千葉県殿塚古墳・姫塚古墳出土埴輪

一括

【所有者】宗教法人<sup>かんのんきょうじ</sup>観音教寺（千葉県山武郡芝山町芝山 298）

芝山町立芝山古墳・はにわ博物館保管

殿塚古墳・姫塚古墳は、下総台地の東部、<sup>よこしばひかりまち</sup>横芝光町に所在する<sup>しばやま</sup>芝山古墳群を構成する前方後円墳で、その築造は6世紀後半と考えられる。昭和31年に学術調査が行われ、多数の形象埴輪が出土した。特に姫塚古墳では、墳丘北側から各種の人物埴輪・動物埴輪が列をなして出土し、埴輪を用いた祭祀の有り様をよく表している。出土した埴輪は<sup>みずら</sup>美豆良を結び、<sup>あごひげ</sup>顎髭をたくわえ、<sup>やまたかぼう</sup>山高帽を被った大形の男子、馬とそれを引く<sup>まご</sup>馬子、正装した<sup>みこ</sup>巫女など多彩であり、大形かつ精巧で造形に優れた個体が多い。特に男子像はその風貌が独特で、この地域における埴輪の特徴をよく示している。

これらは、東日本を代表する造形の優れた埴輪群であり、関東地方における古墳時代後期の埴輪祭祀の盛行を伝える一括として、高い学術的価値を有する。  
（古墳時代）



画像提供：芝山町

⑥ <sup>ならけんほけのやまこふんしゅつどひん</sup> 奈良県ホケノ山古墳出土品

一括

【所有者】 奈良県（奈良県奈良市登大路町 30）

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館保管

奈良盆地の東縁に所在する出現期の前方後円墳で、全長約 80m、古墳時代初頭（3 世紀中頃）の築造と推定され、後円部の墳頂部中央には、石槨<sup>せきかく</sup>と木槨<sup>もっかく</sup>の二重構造からなる埋葬施設の「石囲い木槨」が築かれている。出土品は、画文帯同向式神獸鏡<sup>がもんたいどうこうしきしんじゅうきょう</sup> 1 面や破碎鏡のほか、銅鏃<sup>どうぞく</sup>・鉄鏃<sup>てつぞく</sup>各 70 点以上、素環頭大刀<sup>そかんとうたち</sup>をはじめとする刀剣類、鉄製農工具類などや、装飾性に富んだ二重口縁壺、小形丸底土器からなり、大部分の武器類や農工具類は木槨<sup>もっかく</sup>の蓋上<sup>ふた</sup>に、土器は木槨上部を取り囲むように配され、畿内中枢部における最初期古墳の葬送儀礼の実態をよく表している。

これらは、弥生時代から古墳時代への過渡期において、古墳文化の成立過程や開始年代を示す資料であるとともに、古墳時代前期に盛行する副葬品組成や壺形土器を主体とした埋葬儀礼の実態をよく示す一括であり、その学術的価値はきわめて高い。（古墳時代）



画像提供：奈良県



## <歴史資料の部>

(有形文化財を重要文化財に 2件)

### ① <sup>ひきやくどんやいのくちやきろく</sup>飛脚問屋井野口屋記録

33冊

【所有者】学校法人大阪経済大学（大阪府大阪市東淀川区大隅 2-2-8）

大阪経済大学 日本経済史研究所保管

飛脚問屋井野口屋は、享保8年(1723)に尾張藩から御用飛脚<sup>ごようびきやく</sup>の認可を受けた後、明治2年(1869)まで、藩主や家臣の書状・金銭・荷物等の輸送を無償で請け負う代わりに、同藩領内の町村と主に京・大坂との間の通信運輸業務の独占を長期間認められた。

本記録は、井野口屋内部で作成されたものとみられ、袋綴装四ツ目綴の冊子装 33冊からなり、井野口屋山田家の由緒、飛脚業の濫觴<sup>らんしょう</sup>と尾張藩御用飛脚を務めるに至った経緯、その後の尾張藩との交渉や営業、家政等の記事を収録する。

飛脚問屋の家に伝来した資料に限られる中で、本記録は名古屋や京・大坂で活躍した町飛脚について、成立期から衰退期までの経営を俯瞰することができる貴重な史料で、社会経済史上に学術的な価値が高い。(江戸時代、18・19世紀)



【所有者】広島県（広島県広島市中区基町10-52）

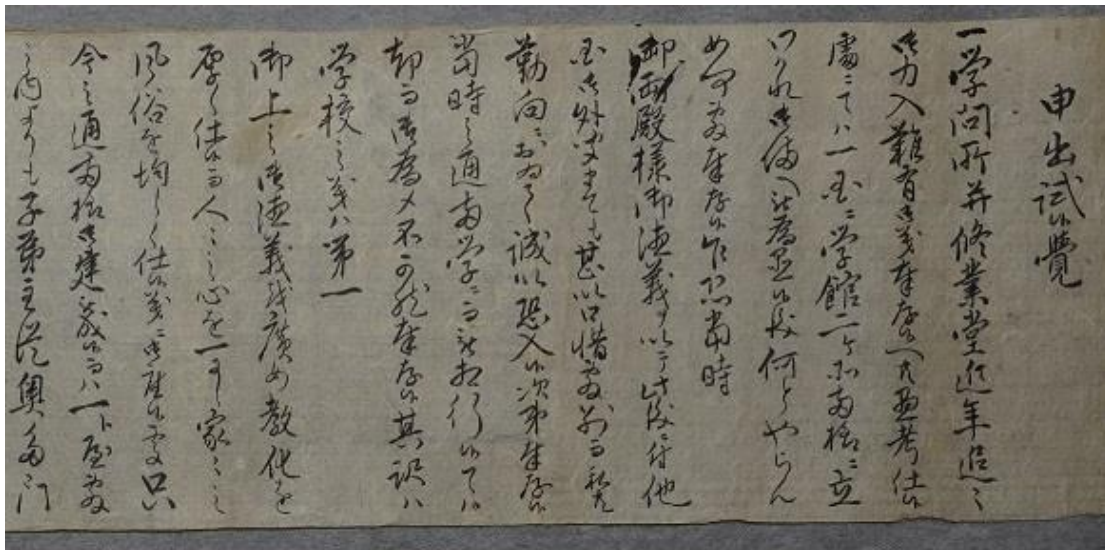
頼山陽史跡資料館保管

広島頼家は、江戸時代後期の著名な漢学者・頼山陽<sup>らいさんよう</sup>を生み出した家で、山陽の父春水以降広島藩の藩儒<sup>はんじゆ</sup>となる優れた儒学者を輩出した。

本資料は、頼家の人々が作成あるいは授受した著述<sup>ちよじゆつこうほん</sup> 稿本類、文書・記録類、書状類のほか、絵図類、典籍類、書画類、器物類から構成され、同家の広島藩藩儒としての事績を明らかにするとともに、同家における修学や儒教祭祀のありよう、同家と学者・文人・為政者との幅広い交流の具体を伝える。

本件は、頼家の人々に関する学問の内容と生涯の事績を研究する上での基礎資料で、儒学者の家の成り立ちと展開、同家の生活文化を窺わせるなど、わが国の江戸時代における思想史・文化史上に学術的な価値が高い。

（江戸時代～明治時代 18・19世紀）



申出試候覚

### 3. 登録有形文化財（美術工芸品）の登録

#### ＜考古資料の部＞

あいざわただひろしゅうしゅうこうこしりょう  
相澤忠洋 蒐集考古資料

39, 370点

【所有者】みどり市（群馬県みどり市笠懸町鹿 2952）

岩宿博物館保管

相澤忠洋（1926～1989年）は、群馬県の赤城山麓を中心に調査・研究活動を行った考古学者である。本格的な活動は、太平洋戦争終結後に行商の傍らで行われ、昭和24年に岩宿遺跡<sup>いわじゆく</sup>において関東ローム層中から黒曜石製の尖頭器<sup>せんとうき</sup>を発見したことで、ローム層中に人類文化が存在することを明らかにした。これにより、現代では一般的となった「旧石器時代」を列島内で認識する端緒になったことは、あまりにも著名である。その後も、相澤は赤城山麓を中心にして遺跡の踏査や蒐集活動を重ねる中で、全国の著名な遺跡の発掘調査などにも多く参加した。

岩宿遺跡の発見もあり、研究の主眼が旧石器時代から縄文時代早期に置かれたことで、本蒐集品はこの時代の遺物を主体とするが、相澤の生涯通しての活動の中で得られた旧石器時代から歴史時代までの考古資料で構成されている。

